

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2016.10) 平成27年度:36.

高次脳機能障害により変化した患者の新たなその人らしさを家族が見出すプロセス

寺島 陽香, 片桐 実紀

高次脳機能障害により変化した患者の新たなその人らしさを家族が見出すプロセス

キーワード：悪性脳腫瘍、高次脳機能障害、家族看護

旭川医科大学病院 10階東ナースステーション ○寺島陽香 片桐実紀

【目的】

悪性脳腫瘍により高次脳機能障害が出現し、その人らしさが変化した患者に対し、家族がどのような心理過程を経て共に生活しているかを把握したいと考えた。

【方法】

悪性脳腫瘍でK病院に入院した経緯があり、後遺症に高次脳機能障害を呈している患者の家族2名（以下A氏、B氏とする）を対象とした。対象者に20分程度の半構成的面接を実施し、語られた内容は許可を得て録音した。逐語録を作成し、内容を類似性に沿って要約して思いの変化を関連図とした。本研究はK病院の倫理審査委員会の承認を受け、対象者には研究の主旨や個人情報の保護等について説明し同意を得た。

【結果】

A氏：夫に記憶障害、人格変化及び軽度の失語が出現していた。

B氏：母に記憶障害と軽度の失語が出現していた。

A氏は、理解力の低下がある夫に対し、理解が出来るよう何度も説明する煩わしさを感じる

ことがあった。しかし、厳しい性格の夫が穏やかな性格へ変化したことで、夫を大切に思い前向きに生活できるようになったと感じていた。また、夫の希望を尊重し、夫の趣味を共に楽しみ、一緒に過ごす時間が増えたと考えていた。

B氏は、記憶障害が憎悪していく母を目の当たりにし、ショックを受けていた。しかし、病気であっても、家事など自分でできることは自分で行うべきであるという考えで母を見守り、共に過ごすようにしたことで、家族間のコミュニケーションが増加したと感じていた。関連図として表わすことで、家族はその人らしさが変化した患者に対しネガティブな思いと肯定的な思いとの間で葛藤していることが明らかとなった。

【考察】

家族は葛藤を抱きながらも、患者と共に生活する中で症状により変化した患者を新たなその人らしさとして受け入れ、新たな関係性を構築したと考える。その関係性を維持できた要因は、共に過ごす時間に、患者がその人らしく生活できるように支えるという意味を見出したからであると考えられる。